

「アーサー王とゴーラゴン王」^①

作者不詳

高木麻由美・橋本万里子（訳）

一

アーサー王は、国中から重臣や貴族を招いて、かの有名な五旬節の祝いをとりおこなった。この神聖な儀式が滞りなく挙行されると、王にふさわしい美と贅をつくした宴席で客をもてなした。皆が贅沢な宴を楽しんでいると、アーサー王は上機嫌で、隣に座っている王妃に腕をまわし抱き寄せ、皆の前で愛情のこもった口づけをした。驚いた王妃は顔を赤らめて王を見つめ、なぜこのような場で口づけをするのですかと尋ねた。

アーサー王「私にどれだけ富があっても、そなたが一番の喜びで、そなたが一番愛おしいからだ」

王妃「まあ。それなら、私の気持ちもわかっていらっしやるということね」

アーサー王「もちろんそなたの心は私に向いているし、そなたが私を愛しているのもよくわかってる」

王妃「アーサー、あなたは思い違いをしているわ。女というものの心も本性も理解していらっしやらない」

アーサー王「もしそうなら、わかるまで全力をつくしてみよう、どんな苦勞もいとわない。それまで食事はしまい。天に誓って」

二

宴が終わると、アーサー王は給仕頭のカイウスを呼び寄せて言った。「私の甥のウオルウェインと共に馬でついて来てくれ、急ぎ用事があるのだ。あとの者は、私が戻るまで手厚く客達をもてなすように」

アーサー王はカイウスとウオルウェインを伴に、賢者として名高い隣国の王ガールゴールの元に急いだ。三人は城を出立してから、何も食べず一睡もせず、昼夜を問わず駆け続けた。三日が経ち、疲れ果てて、やつとある谷間にたどり着いた。谷の向こうは大きな山で、裾野は美しい森になっていた。森の奥深くに、光沢のある石でできた強固な要塞が見える。アーサー王はカイウスに、先に行きあの町が誰のものか調べてくるように命じた。カイウスは全速力で駆け、要塞の中に入って行った。引き返す際に、城の外堀に入ってきたアーサー王に出会いこう伝えた。「あの町こそ我々が目指すガールゴール王の町に相違ありません」

三

ガーゴール王は、ちょうど晚餐の席に着いたところだった。アーサー王は馬に乗ったまま進み出て、ガーゴール王と晚餐の客達に丁寧に挨拶した。ガーゴール王は尋ねた。

「そなたの名は。どちらから参られたのか。なにゆえそんなに急いで」

アーサー王 「ブリテンの王アーサーと申します。女の心、本性、やり方を教えていただきたい。ガーゴール王は、そういったことに通じていらっしやると伺いました」

ガーゴール王 「それはたいそう難しい質問ですな、アーサー王よ。答えられる者はそうはいまい。まずは、馬から降りて一緒に食事を取り、今日はゆっくりお休みなさい。長旅でたいそうお疲れの様子だ。明日、私が知っていることをお話しましょう」

アーサー王は、疲れてなどいない、教えてもらうまでは何も食べないと強く言い張ったが、ガーゴール王や同席の者達があまりにも勧めるので、とうとう馬から降り、用意された王の向かいの席についた。夜が明けけるやいなや、アーサー王はガーゴール王に言った。

「さあ王様、どうぞお教え下さい。今日お話しいただけるお約束でした」

ガーゴール王 「アーサー王よ、愚かではないか。これまで、そなたのことを賢い方とお見受けしていたが、女の心、本性、やり方がどのようなものかなど考えた者はいないし、私がお教えできることもない。しかし、私にはトーレイルという兄がおり、隣国を治めている。兄は私より経験

があり賢明だから、トーレイル王がよからう。彼に会い、私の代わりに教えてくれるよう頼むとよい」

四

ガーゴール王に別れの挨拶をすると、アーサー王は城を出てすぐに旅立った。四日駆けつけて、トーレイル王の元に着いた。すると、この王もまた晚餐中である。

トーレイル王はアーサーと挨拶を交わし、彼に何者かと尋ねた。アーサーは、ブリテンの王であると名乗り、ガーゴール王に聞いてここへ来たのだと答えた。

トーレイル王 「何事だというのだ」

アーサー王 「私は女の心、本性、やり方を知りたいのですが、誰も答えられないのです。それで、ここに来るよう言われました。おわかりなら、是非お教え下さい」

トーレイル王 「それはたいそう難しい質問ですな、アーサー王よ。答えられる者はそうはいまい。それに今はそのような話をする時間でもない。まずは、馬から降りて食事をされよ。今日はお休みなさい。明日、知っていることをお話しするとしよう」

アーサー王は答えた。

「時が来たら食べることができましょう。お教えいただけない限り、絶対に何も食べません」

しかし、トーレイル王も同席の者たちもあまりに強く勧めるので、アー

サー王はしぶしぶ馬から降り王の前に座った。翌朝、アーサー王はトールレル王に話してくれるように頼んだ。

ところが、彼は実は何も知らないのだと打ち明け、自分より経験がある兄のゴラゴン王のところへ行くようにと言う。アーサー王が聞きたがっていることを知る者がいるとしたら、それはゴラゴン王に間違いないのだと。

五

アーサー王はゴラゴン王の町に急ぎ、二日後、目指す地に着いた。すると、ここでも前と同じように晚餐中であつた。

挨拶を交わし名を名乗り、訪ねて来たいきさつを話した。アーサーが例の質問を繰り返すので、ゴラゴン王は言った。

「それは難しい質問だ。まずは馬を降りて食事をするがよい。明日になつたらお教えしよう」

アーサー王は断り、何度勧められても教えてもらうまでは絶対に馬から降りないし、食事もとらないと宣言した。ゴラゴン王は、これ以上言つても無駄だと見てとり、

「アーサー王よ、食べないという決心がそんなに固いのなら、いたしかたない。話すのはいたいそう骨が折れるし、話したところでどれほどの役に立つかわからないが、ある王の身に起こったことをお話ししよう。それで、そなたは女の心、本性、やり方を判断することができるだろう。だからアーサー王よ、どうか降りて食事をしてほしいか。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

「アーサー王とゴラゴン王」

アーサー王「お話し下さい。食事のことなどもう言つて下さるな」

ゴラゴン王「ではせめて、供の者は降りて食事をとるように」

アーサー王「では、そうさせましょう」

さて、二人が食卓につくと、ゴラゴン王は話し始めた。

「アーサー王よ、そんなにも知りたいのなら、熱意のままによく聞いて心に留めおきなさい」

六

ゴラゴン王の話

ある王のことだが、彼は高潔で非の打ち所なく、富を持ち、公平で誠実な王として評判だつた。この王の作らせた庭は他に類を見ないもので、ありとあらゆる樹木や果樹、香辛料の種が植えてあつた。低木の中に、王と同じ背丈のほっそりした美しい若木があつた。王が誕生した夜、同じ時間に芽を出したこの若木は不思議な宿命にあつた。誰でもその若木を切り落としてその枝の細い方で王の頭を叩いて「狼になれ、狼の知力を持つ」と言うと、王はたちまち身も心も狼になってしまうのだ。そこで、自分の身を守るために、王は若木を見守るようになった。頑丈な堀を高く庭にめぐらせて、信頼する庭師以外は誰一人庭に入れなかつた。日に三度も四度も若木を見に行く。そうするまでは食事もとらず、ときには晚餐まで食事をしないこともあつた。王以外、この秘密を知る者はいながつた。

四九

七

さて、王妃はたいそう美しい方だった。見かけは穢れなく誠に綺麗なのだが、その実、貞淑な妻とは言えず、美しさが仇となった。というのも、彼女はある異教の国の王子に思いを寄せていて、夫の愛よりもその若者の愛を望んでいた。彼女は、若者の望み通り、法によってとがめられることなく情事に耽るために、何とか王を陥れたいと躍起になつていたのである。ところで彼女は、王があまりにもしばしば庭に入つて行くので、わけを知りたいと思ひながら聞けずにいた。ある日のこと、王はいつもより遅く狩りから戻ると、やはり一人で庭に入つて行く。王妃は、隠し事に我慢ができなくなつて（女とは何もかも知りたがるものだ）夫が晚餐の席につくなり、うわべはにこやかに尋ねた。

「どうして日に何度も庭に行かれるのですか。お食事も召し上がらないで、遅くまでそこにいらつしやるのはいいたいなせですか」

すると、王はこう答えた。

「そなたには何の關係もないことだし、話す必要もない」

王妃はたいそう腹を立て、夫が庭で誰かと密通しているに違いないと思ひ込み、声を上げた。

「天の神を証人に誓つて、金輪際あなたとはお食事をいただきません。理由をお話ししていただけない限りは、絶対に」

そう言つていきなり立ち上がる、寝室に退いてしまった。そして、いかにも具合が悪いといったふりをして、それから三日というもの、床についたまま何一つ口にしなかつた。

八

三日目になつても王妃が強情に断食を続けるので、彼女の生命の危険を案じた王は、起きて食事を取るようにと優しい言葉で頼み、促しもした。そして彼女が知りたがつていることは、これまで誰にも話さなかつた自分の秘密なのだと言つた。王妃は答えた。

「ご自分の妻に隠しごことをなさつてはいけません。御存じでしょう、あなたに十分愛されていないと感じるくらいなら、いつそ死んだほうがましです」

王がどうやつても王妃は決して食べようとはしなかつたので、こうなつては王も心が揺れて妻がいじらしく思われ、決心がぐらつてしまつた。決して誰にも秘密を漏らさないように、その若木を王妃自身の命と同じくらい神聖なものとして扱うようにと誓わせた上で、王は秘密を打ち明けた。

心底願ひ求めていた真実を知つた王妃は、これまで以上の献身と愛を王に誓つた。一方で王妃の心にはすでにある策略が思ひ浮かんでおり、それによつて彼女は長い間もくろんできた罪を犯すことになる。明くる日、王が森へ狩りに出かけると王妃は斧をつかんでひそかに庭に入り、例の若木を伐り倒して持ち帰つた。王が戻つたことに気づくと、王妃はゆつたりとした袖の中に若木を隠して彼を出迎えた。腕を広げて王に抱きつき、接吻をするふりをして突然袖口から若木を取り出すと、何度も彼の頭を打ち、「狼になれ、狼になれ」と叫んだ。しかし、続けて「狼の知力を持つて」と言うつもりが、「人間の知力を持つて」と言つてしまった。すぐさま彼女が言つたとおりのことが起こつた。狼になつた王は急いで森へ逃げ、王妃がけしかけた獵犬が後を追つた。王は人間の心を失つてはいなかつた。

アーサー王よ、これで少しは女の心、本性、やり方がわかったであろう。さあ、馬から降りて食事をとるがよい。話は長い、続きはその後だ。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない。

アーサー王 「でもたいそう面白い話です。早くお続けください」

ゴラゴン王 「続きを聞きたいようだ。それではよくお聞きなさい」

ゴラゴン王の話の続き

王妃は夫を追い出すと、すぐにかの若者を呼び寄せて王権を与え、その妻となった。その一方で、狼になった王は逃げ込んだ森の奥深くで二年の間さまよったのち、野生の女狼メスオオカミと結ばれて二匹の子をもうけた。彼は今もなお人間の心を持っていたので、王妃の悪事を覚えており、どうにかして彼女に復讐したいと思っていた。彼のいた森の近くには王妃が新しい王とよく滞在する城があった。人間でもある狼は常に機会をうかがい、ある晩女狼メスオオカミと子狼を連れてふいに町へと突入した。狼はそこで、かの若者と王妃の息子二人が監視の目の届かない砦の下で遊んでいるのを見つけて襲いかかり、無惨にも四肢ばらばらに引き裂いて殺した。周囲の者が気づいたときにはもう遅く、大声をあげて追いかけたが、すばやい狼は無事逃れきった。この惨事に王妃は悲嘆に暮れ、あの狼たちがやって来たら見逃すなと家臣に命じた。まだ気が治まらない狼は、日

を置かずして連れと共に町に現れた。城門にいる王妃の兄弟の伯爵たちに出くわすと、襲いかかって内臓をえぐり出しおぞましい姿にした。この騒ぎに家来たちは城門を閉ざし、子狼を捕らえ首をつるして殺したが、あの抜け目のない父狼だけは、捕まらずに無傷で逃れた。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

ゴラゴン王の話の続き

子を失った苦しみは狼を狂わせ、彼は夜ごと大量の家畜の群れを襲い、殺した。住人は狼を捕らえようと、何頭もの猟犬を従えて毎晩待ち伏せした。日々の追跡にたまりかねた狼は隣国に逃れて惨殺を続けた。しかしそこでもすぐに住人に追われ、三つ目の国へと逃れた。今や、彼の怒りの矛先は獣ばかりでなく人間にも向けられた。三つ目の国の王は、若くして慈悲深く、知恵と勤勉で名を馳せた人物であった。人も獣も大量に殺害されたという報告を受けた王は、日を定め、狩人と猟犬の強力な軍勢で狼を捕らえることにした。恐怖で誰もが外出を控え、夜通し眠らずに狼の来襲を見張った。

さて、ある晩、狼は血を求めて近くの村に行った。とある家の軒下に潜んで、中の会話に聞き耳を立てていた狼は、明日王が狼を捕獲することを知り、さらに、その王が寛大で慈悲深いことも分かった。狼は震えながら森の奥深くに引っ込み、自分にとって最善の策を思案した。

十二

翌朝、狩人と家来たちは相当数の獵犬を連れ、角笛を鳴り響かせ大声を上げながら森に入って行った。王はその後を腹心の友二人とゆつくり進んでいた。狼は道の脇に身を隠し、家来たちが通り過ぎた後、容貌から王を見分け、顔を伏せて素早く王に近づいていく。前肢を王の右足にからませ、声を出し、許しを請うように優しくなめようとした。と、王をお守りしている従者二人が、見たことのない大きさの狼を見て叫び声を上げた。

「王様、この狼です。これが追跡中の狼です。襲われないうちに早く殺してしまわなければ」

狼はこの騒ぎに全く動じず、王にぴたりとついて優しくなめ続けていく。王は不思議と心を動かされ、しばらくじっと見つめていた。そのうち、この狼は獐猛であるどころか許しを請うているのだと思ひ始めた。それは驚きだった。危害を加えてはならないと王は皆に命じ、この狼はどうも人間の心がわかるようだと言う。王は馬上から右手を伸ばし、優しく頭をなで耳をかいてやった。そして、ぐいと掴んで持ち上げようとした。狼は王の意図に気づき、自ら馬の首にひょいと跳び上がり王の前に座った。

王は皆を呼び、城に戻ることにした。

十三

帰途の森で、真っ直ぐな枝角をもった巨大な牡鹿が現れた。

「この狼の価値と力を試してみよう。私の命令に従うかどうか見てみよう」

五二

王は狼を牡鹿の方へ押しやり大声で合図した。狼は牡鹿に飛びかかって襲い、喉に噛みついて殺して見せた。王は狼を呼び戻すと、

「こんな風に役に立ってくれるなら、お前を生かしておいてやろう」と言い、狼を連れて城へ戻った。

ゴラゴン王「アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

アーサー王「天の全ての神が『アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい』と叫んでも、話の続きを聞くまでは、私は断じて馬から降りず、食事もしません」

十四

ゴラゴン王の話の続き

こうして狼は王のもとにおかれ、寵愛を受けた。王の命令には何でも従い、誰にも獐猛なところを見せず危害も加えなかった。晚餐では王の前に座ってパンを食べ、王と同じカップを使った。王が行くところどこへでもついて行き、夜は必ず王の長イスの傍で寝た。

あるとき王は、他国との協議のため急遽長旅に出ることになった。十日間は帰れそうもない。王は王妃を呼び寄せて言った。

「すぐ旅立たねばならない。この狼のことはそなたに頼んだぞ。私に代わって面倒を見、言うことを聞いてやってくれ」

ところが王妃は、抜け目なさそうなのこの狼が大嫌いだった。妻が夫の愛するものを嫌うのはよくあることだ。

「怖いわ。あなたがいないと、夜襲われてはずたに殺されてしまいそうだわ」

王は答えた。

「大丈夫だ。長く一緒にいたが、こいつがそんなことをするとは思えない。だがそんなに怖いなら、鎖でベッドにくくりつけておこう」王は金の鎖を作らせ狼をベッドにくくりつけると、急ぎ旅立った。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

アーサー王 「私は食べたくないのです。もう言ってくたさるな」

十五

ゴラゴン王の話の続き

王が発すると狼と王妃が残った。王妃は狼の世話をせず、夜だけという王の言に反して、ずっと狼を鎖につないでおいた。実は王妃は給仕頭と密通していて、王が留守になると必ず彼の元を訪ねていた。王が旅立って八日目に、二人は狼のことなどまるで気に留めずにまっ昼間からベッドに入っていた。二人の抱擁を目にした狼は、激しい怒りで目は血走り、首の毛は逆立ち、今にも襲いかからんばかりであった。が、鎖に引き戻されてしまう。二人が不実な情事をやめないのです、狼は歯ぎしりをし地面をかきむしる。大声でうなりながら身体中の怒りをぶつけ、全力で鎖を引き、ついにまっ二つに切ってしまった。狼は給仕頭に襲いかかり、ベッドから投げ落とすと、無残にも引き裂き半殺しにした。しか

「アーサー王とゴラゴン王」

し、王妃には手を出さず、ただ憎しみのまなざしでじっと見つめるだけであった。給仕頭の悲痛なうめき声を聞きつけて、召使たちがドアを破ってなだれ込んだ。騒ぎの理由を聞かれて、王妃は話をでっち上げ、

「狼が王子を食べてしまったの。給仕頭が助けようとして、反対にやられてしまった。お前たちが来なかつたら、私も同じような目に合うところだったわ」

と言うのだった。瀕死の給仕頭は客間に運ばれた。王妃は、王にこの真相を見抜かれぬよう、狼にどうやって復讐したものか考えながら、王子を乳母とともに地下の奥深い部屋に閉じ込めてしまった。それで誰もが王子は狼に食べられたと思っ込んだ。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、馬から降りて食べなさい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

アーサー王 「お願いです、お片づけ下さい。こんなに料理の皿があつては話の邪魔になります」

十六

ゴラゴン王の話の続き

事件後、予定よりも早く王が戻ってくるという知らせが王妃に届いた。この不実な妻は非常に狡猾であり、髪を短く切り頬を傷つけドレスを血まみれにして王を出迎え、こう叫んだ。

「ああ！ああ！あなた！あなたが留守の間に、私がどんな目に遭ったことか！」

五三

王はもの言えぬほど驚き、何があつたのか尋ねた。王妃は答えた。「あの卑劣な狼のことよ、ずっとあなたの狼を疑っていましたが、私の膝の上であなたの息子を貪り食ってしまったのよ。給仕頭が助けようとしてくれたのに、あの獣は彼を引き裂き、殺してしまふところでした。もし家来たちが押し入ってこなかったら、私も同じ目にあつていたでしょう。見てちょうだい、ドレスに飛び散つたあの子の血を。これが動かぬ証拠よ」

王妃が話し終えぬうちに、王の気配を感じた狼が寝室から飛び出し、抱擁を求め王の懐へ飛び込んだ。狼は手柄を誇るかのように、これまで以上に喜んで王の周りを飛び跳ねた。妻が嘘をつくはずがないし、それにしては狼の喜びに満ちた跳躍はいつたかどうかと王は困惑し、判断に窮した。

この事件で王はあれこれ思い悩み、食事もとらなかつた。狼は王のかたわらに座り、前肢で王の足にそつと触れ、マントの端をくわえ、ついで来るようにと頭を動かした。王は狼のいつもの合図に気がつき、ついで行つた。つぎつぎに部屋を通り抜け、ついに地下の部屋に辿り着いた。狼はかんぬきの掛かつた扉を前肢で三、四回ノックして開けるように訴えた。しかし、鍵が見つからなかつた。王妃が隠していたのだ。狼は待ちきれず、少し後ずさりすると四肢の爪を広げて走り体当たりで扉を打ち砕いた。狼はゆりかごへと突進し、毛むくじらの肢で中にいる王子を優しく王の前に抱き上げ、王は王子にキスをした。

十七

王は驚嘆し、「なにか腑に落ちない」と言った。狼は王を先導し、瀕死の給仕頭の元へと案内した。給仕頭を見るなり狼が飛びつこうとしたの

で、王は必死になつてそれをとめた。王は給仕頭の前に腰をおろし、どうしてこんな目に合つたのか、ことの発端について尋ねたが、狼から王子を助けようとして襲われたと言うばかりだつた。給仕頭は王妃を呼び、自分の言うことが真実であると裏づける証言を得た。それに対して王は言った、

「この大嘘つきめ。私の息子は生きている。死んでなどいない。今会つてきたばかりだ。お前と王妃が私を裏切り、話をでっち上げたと確信せざるをえない。嘘はそれだけではないのだから。わかっているぞ。主人の名譽が汚されたことに我慢ならなかつた狼が、常になく激昂しておまえを襲つた、というのが真実だ。さあ、今すぐ本当のことを言うのだ。さもないと、いと高き天の神の下で、おまえを燃えさかる炎に送つてしまふぞ」

狼は給仕頭に詰め寄り、居合わせた者が止めなければ再び彼をずたずたに噛みちぎるところであつた。

いまや、もう多くのことはいらなかつた。時に脅し、時になだめるようにして王が告白を強要すると、給仕頭は自らの罪を白状し、いやしくも許しを請うた。しかし、王は怒りに燃え、彼を牢屋に閉じ込めた。すぐさま国中から重臣を呼び寄せ、この大罪をどう処分するか話し合つた。刑が宣告された。給仕頭は生きながらに皮をはがされ、絞首刑に処された。王妃は馬で四肢を裂かれ、火の中に放り込まれた。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

アーサー王 「どうぞ食事をお続け下さい。私のことは心配ご無用です」

十八

ゴラゴン王の話の続き

この事件の後、王は、狼の並外れた利口さと働きについてじっくりと考えをめぐらし、さらに賢者とも話をした。その結果、これほど頭が良ければ人間と変わりがないという考えに至った。

「獣にこれほどの知恵があるはずがないし、この狼の献身ぶりは他に類がない。こいつは言われたことがちゃんとわかるし、命令にも従う、どこに行くにも必ずついて来る。私が嬉しい時はこいつも喜び、悲しい時はこいつも悲しむ。私への悪事にあんなにも激しく仕返しをしてくれたとは、非常に利口で有能だ。人間に間違いない。きっと、呪いかまじないで狼の姿に変えられているのだ」

そばで聞いていた狼は大喜びし、王の手足をなめ膝のあたりに身をすり寄せて、それが真実なのだと言葉や草で表すのだった。

十九

「見よ、この者の喜びようを。これが紛れもない証だ。もはや間違いない。何とかがして彼を元の姿に戻せるなら、そのために全財産、いや、たとえ命を危険にさらすこともいとわれない」

王は考えた末、陸でも海でも狼の好きなところへ先に行かせることにした。

「恐らく」王は言った。

「この者の国に着いたら、事情が明らかになり救ってやれるかもしれない」

先導に立った狼はすぐさま海に向かい、海を渡りたいと言わんばかり

に波へと駆けた。実は彼の国はこの国と隣接しており、一方は海で隔てられ、もう一方は陸続きだったが陸路は遠回りになる。王は狼が海を越えたがっているのだと知ると、船団を用意させ軍隊を集めた。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

アーサー王 「狼は海を渡りたくて、一人海岸に立っているのですね。そんな狼を放っておくと、あまりに気持ちちはやって溺れてしまわないでしょうか」

二十

ゴラゴン王の話の続き

王は船を用意させ、大勢の武装した兵士とともに出航した。三日目に狼の故国へと無事にたどり着いた。船が岸に着くと、狼は真っ先に飛び降り、ここが自分の国だとはっきり示した。王は数名の家来を連れて船を降り、残りの者には船で待つように命じて、自らはこっそり近くの町へと急いだ。町に行きつく前にこの次第が明らかになった。その国では、高貴な者も下々の者も皆、今の王のひどい圧政にあえていた。ずる賢い王妃によって狼に変えられてしまった前の王を思い嘆き、彼がいかに寛大で慈悲深かったかを忘れてはいなかった。狼を連れた王は事情を理解して、現在の王の居場所を確認してから、急ぎ船に戻った。すぐに王は敵の王と王妃を捕らえ、支配下においた。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、馬から降りて食事をするがよい。そなたの質問はたいそう難しく、答えられる者はそうはいまい。私の話を最後まで聞いても賢くなるというものでもない」

アーサー王 「あなたはハープ奏者のようですね。歌の途中で歌詞のつかないフレーズを繰り返しては喜んで歌うのだから」

二二

ゴラゴン王の話の続き

勝利を確信した王は、その国の重臣たちを召集し、皆の前で王妃に言った。

「あなたは不実で悪い女だ。夫にあんな裏切りを企てるなど、狂気の沙汰だ。が、実際に値しない人間と話をするつもりは毛頭ない。さあ、答えるのだ。夫を狼に変えた若木はどこにある。言わぬ限り、死ぬまで飢え渴き、拷問にかけられるのだぞ。その若木があれば、あいつは人間の姿に戻れるはずだ」

しかし、王妃は何も知らない、その若木なら折って火にくべられたらしいと言うばかりだった。王妃があまりにも白状しないので、王は拷問を命じた。毎日毎日拷問にかけ、苦しめ、食物も飲み物も与えなかった。あまりの責苦に、ついに王妃は若木を王に差し出した。

二二

若木を手にした王は喜び、その太い方で狼の頭を打ち、

「人間になれ。人間の知力を持つて」と言った。

すると、狼はたちまち人間の姿に戻り、その姿は前にも増してずっと美しく立派で、ひと目で高貴な人物とわかるほどであった。王は、目の前に立つ秀麗な男が受けた不当な境遇に同情し、歓喜のあまりそばに駆け寄り抱擁とキスを与え、涙した。抱き合う二人のいつまでも続けため息と涙に、周りの者も皆思わず涙した。一人は自分に示された数々の恩情に感謝し、もう一人は相手への心遣いの不足を悔やんだ。居合わせた皆も大喜びした。重臣たちは人間に戻った王に帰服を誓い、古来のならわしに従って彼は主権を取り戻した。次いで、姦通を犯した二人が彼の前に連れて来られた。王は、処罰の決定と刑執行の許可を求められた。彼は異教の王に死を宣告し、王妃には離縁を申し渡した。彼女は死刑に処されるべき罪を犯したが、慈悲深い王に命を助われたのだ。狼になった王を救ったもう一人の王は榮譽をたたえられ、多くの富を与えられて自国に帰った。

ゴラゴン王 「アーサー王よ、これで女の心、本性、やり方がわかっただろう。しからば、ご自分のことに目を向け、賢くなったかどうか試してみよ。馬から降りて食事をするがよい。私は話をしたし、そなたはそれを傾聴した。食事をするにはこれで十分だろう」

二二

アーサー王 「いえ、私の質問に答えていただくまでは、降りません」

ゴラゴン王 「質問とは？」

アーサー王「あの女のことです。悲しげな顔をしてあなたの正面に座わっている。目の前に血まみれの首をのせた皿を置いて、あなたが微笑むたびに涙を流し、あなたが奥方に口づけをするたびに血で汚れた首に接吻をする、その人は一体誰なのです」

ゴラゴン王「これが私だけの秘密なら、アーサー王よ、その答えを決して口にしない。しかし、同席している者はみなこの秘密を知っている。そなたが知ってもかまうまい。私の向かいにいるこの女こそ、王である夫に重い罪を犯した女なのだ。あれは私自身の話だったのだ。そなたも聞いた通り、私は人間から狼になり、狼から人間に戻った。私が狼になって最初に行ったのは、すぐ下の弟トールレイル王の国だった。私を手厚く面倒見てくれたのは、末の弟ガーゴール王だった。もうおわかりだろう。あなたが最初に訪れた王だ。そして、向かいの女が抱擁している皿の上の血まみれの首は、私への重い罪を犯す元となった彼女の若い愛人の首だ。元の姿に戻ったとき、私は女の命を助けてやった代わりにたった一つ罰を与えた。いつも目の前に情夫の首をもち、私が新しい妻に口づけするたび、罪を犯す原因となった男の首に接吻しなければならぬ、という罰を。首は腐らないように処置を施してある。この女にとっては、これ以上の罰はなからう。自分の邪悪さを永遠に世にさらし続けることになるのだから」

二四

ゴラゴン王「アーサー王よ、さあ、馬から降りていいだろう。もうあなたはお客だ。好きなだけご滞在なさるがよい」

ここでやっと、アーサー王は馬から降り食事をした。聞いた話に不思議な感動を覚え、彼は翌日、九日ぶりに帰城の途に就いた。

本文 注解

- ① ラテン語の原著は G・L・キットリッジ教授が *Studies and Notes in Philology and Literature*, vol. viii. Boston: Ginn and Co.) の中で最初に編集した。教授が使用した原著は羊皮紙に書かれた十四世紀後半の写本（オックスフォード大学ボールドリアン図書館 MS. Rawl. B. 49 所蔵）である。この写本には「アーサー王とゴラゴン王」のほかにも、ラテン語による数編のアーサー王物語（*Historia Meriadoci Regis Cambriae*、*Historia trium Magorum*、*Narratio de Tirio Appolonio*、*Liber Alexandri..de preliis*、*Aristoteles de regimine sanitatis*）が収録されている。このうち、メリアドクの物語は大英博物館図書館（the B.M.）に所蔵されている写本（MS. Cott. Faust, B. VI）にも収録されており、これはアメリカ人のダグラス・ブルース教授が PMLA: Publication of the Modern Language Association of America, vol. xv の中で編集している。

- ② キットリッジ教授によると、ここにはアーサー王による拒否の言葉が続くはずだが、写本にはその余白がない。

あとがき

アルフレッド・ナット (著)
橋本万里子・高木麻由美 (訳)

「アーサー王とゴラゴン王」は、マッデンの『ガーウェイン卿』に少し言及はあるものの、ハーバード大のG・L・キットリッジ教授が昨年編集するまでアーサー王伝説研究家たちに知られていなかったようである。わたしは、この物語は彼によって説話研究の最も注目すべき貴重なテーマの一例になったと断言する。

これからわたしが述べることは、キットリッジ教授の研究を要約しパラフレーズしたものに自分自身の見解を加えたものにすぎない。したがって、中世騎士道物語と説話研究に関心のある全ての人には、わたしの要約に甘んずることなく是非とも教授の著書にあたって彼の見解を会得してもらいたい。言うまでもなく、キットリッジ教授の名高い論証に関するわたしの解説におけるいかなる不備も、彼がその責任を負うべきものではない。

経験豊かな説話研究家ならすぐに気づくことだが、アーサーの探求は超自然的人物の不承不承の助けによって初めて成し遂げられるものである。この人物にはプレッシャーが与えられることになっていて、この物語の場合、もてなしを辞退されることがプレッシャーとなる。これは、インドのパラモンの法典と初期アイルランドの規約内で合法的に認められていた、借金を取り立てる際に用いるプレッシャーと類似する。この種の説話に多く見られるように、超自然的協力者は初め、依頼者である人間の要求を回避することに成功する。アーサーは馬から降りて食事をせよという三人の王の誘いに二度は応じてしまいが、三度目の試みでは

意志の強さを見せて誘いを断り、目的を果たす。この三人の王たちは実際に同一人物であるというキットリッジ教授の推測に、異議を唱える者はいないだろう。彼らの三つの名前（もし、「Torleil」の綴りを作家による誤りとして無視するならば）はウェールズ語で狼男 (Werwolf) を意味する用語の変形で、実はゲルマン語と語源上の関連がある。つまり、物語はお伽噺のおなじみの約束事（三題歌）に従っていて、超自然的協力者は人間に三度のチャンスを与え、その人間は、愚かであったり不注意であったりするが、三度目のチャンスをつかむのが常となっている。

しかしそうだとすれば、この物語は明らかに改変を受けている。物語の趣向から分かるように、はじめに登場する末の弟ガーゴール王と次兄のトーレイル王が狼男の弟であるはずはない。狼男が弟であるガーゴール王に庇護を求めたとき、彼は王のことを全く知らなかった。彼らが本当に兄弟であればありえないことである。この指摘は、三人の情報提供者（ガーゴール、トーレイル、ゴラゴン）が実際には同一人物であることを示す部分の回想が支離滅裂であることを如実に示す。さらに、この作品が他作品との混成であることは明らかだ。二重の貫通テーマには「過度の不品行」が描かれており、また、子ども殺しの無実の罪が狼にきせられるという、「獵犬ゲラート」からの挿話が作品内にぎこちなく組み込まれている。一方で、物語の形式と趣向は、古典的で純粹な民話の特色を帯びている。たとえば、三題歌の取り決めで、決まり文句を用いて繰り返しアーサーを断念させようとする試みなどがそうである。その類例は大衆民話の中で語られる事象全般、なかでも、少なくとも過去八百年間、そして現代でも脈脈と生き続けているゲール語の大衆民話の事象に多く見られる。ゲールの民話（アイルランド形式でもスコットランド形式でも）に詳しい読者なら必ず、そのジャンルの類例を「アーサー王とゴラゴン王」の中に見出すことができる。遅くとも十四世紀の終わ

りまでに、あるケルト特有の民話がラテン語訳され、固有の言語から学術語へと翻訳される際におそらくあからさまな改変を受けた。もしかすると、「あからさまではない」改変箇所もあるかもしれない。人物名からわかるように、ラテン語に語り直した人物が手にしたのはウェールズ語による原本だった。民話特有の挿話と枠組みからも明らかのように、この原本が純一な完全版であったことはほぼ間違いない。

つぎに、類似作品の考察に目を向けたい。最も類似している作品は、ゲール文化で今日も広く流布している民話(キットリッジ教授の分析は、ケリー州からヘブリーズ諸島に至るゲール地域一帯に分布する約十種のヴァージョンに基づいている)で、典型的な例は「モラハ」(ラミニーの『西アイルランド民話』に収録、ジェイコブズの『ケルト妖精民話集』にて復刻)である。以下はその概要である。

英雄は超自然的存在と勝負し、二度勝利するが三度目に負ける。彼には光の剣を手に入れて女性にまつわるある話を知るといふ課題が課せられる。彼が(妖精である)妻の忠告に従い義父のもとへ馬で向かうと、そこで別の馬を与えられる。その馬は彼をニアルという光の剣の持ち主のところへ連れて行く。三度目の試みで彼は剣を獲得し、その剣を使ってニアルを脅かすが、その妻の説得で女性にまつわる例の話聞き知る。動物の言葉が理解できたおかげで、ニアルは思いがけず魔法の杖の存在を知る。笑っているところを妻に見られた彼は、彼女にせがまれてその理由を説明してしまう。彼女は最初、彼をカラスの姿に変え、それから馬、狐、狼の順に変身させる。彼は、狼になった自分を捕獲した王に助けられ、護衛を任される。手の怪物の襲撃から王子を守った狼は罪を着せられるが、王は彼を信じる。狼は王子を救い出し、その従者となる。ついに狼は王子を説き伏せて魔法の杖で自分を打たせ、人間の姿に戻る。

ニアルの妻は入水自殺を申し出るが、彼は、もし彼女が秘密を守るなら、自分も誰にも言わないと言う。その後彼は手の怪物を見つけ出して殺害し、年長の王子たちを救い出す。そして英雄に、超自然的敵と戦う術を教える。その敵とは、あの手の怪物の兄(弟)なのだ。

このように、この作品の構成は「アーサー王とゴラゴン王」よりも手の込んだ、特異なものである。人間である英雄は敵対する超自然的存在によって活動を開始する。超自然的存在は、弟(兄)を殺害した者に復讐したがっている。お伽噺の約束事どおり、彼は復讐に失敗する。彼の成功は英雄の敗退を意味するからだ。「アーサー王とゴラゴン王」がそうであったように、「モラハ」にも「獵犬ゲラート」との混成部分が見られる。同様に、「子をさらう怪物」のテーマとの混成も見出せる。三題歌の取り決めはそれほど厳密には守られていない。狼男の妻は、どんな重罪にも値する、きわめて不快な人物というのではなく、語り手による迫害も全く受けないうまま物語の最後を安泰に迎える。このことから、次のことが推測できる。「アーサー王とゴラゴン王」は、「獵犬ゲラート」の変奏であるばかりか、女性の不貞と罰を描くおなじみの東洋物語のうち現在でも流布している中世版の一つの変奏でもある。

次に中世の類似作品二つに目を向けたい。両作品とも「ブルトン・レー」と呼ばれている。このうち一つは、「メリオンのレー」で、一二五〇年までに書かれたことは確かであるが、実際はもっと古いものだろう。もう一つは、マリッド・フランスの「ビスクラヴィレットのレー」である。これは一一八〇年にはすでに書かれていた。

「メリオン」では、英雄メリオンは森で狩をしているときにアイルランドからやって来た美しい女性に出会う。彼女は彼以外の人を愛したこと

がない。これは、自分以外の人間を愛したことのある女性とはつきあわない、という彼の誓いに叶う。彼は彼女と結婚する。彼から、彼が自らを狼に変身させる力を持つ不思議な護符を持っているという秘密を聞き出した彼女は、その護符で彼を狼に変身させてしまう。彼女は夫の家の一人と連れだって父のところへ戻る。狼は群れを率いて彼女を追い、その国を荒らす。義父が結成した狩猟隊によって狼男以外の狼が全て殺害される。狼男は義父に取り入り、義父の保護によって妻から身を守る。狼男は、今度はアイルランドを訪れたアーサーになつく。ある日彼は妻に同行した例の家来を目にし、彼を襲う。周囲の者たちは狼男を殺害しようとするが、アーサーは彼を守る。アーサーは秘密を見抜き、その家来に真相を告白させる。メリオンは元の姿に戻り、罪を犯した妻を捨ててアーサーと共にイングランドに向かう。

この物語は明らかに「アーサー王とゴラゴン王」と「モラハ」と密接な関係にあると同時に、これら二つの物語よりも単純な展開を見せる。この作品の枠組みは不完全で、「獵犬ゲラート」と「怪物と子ども」のテーマとの混成の痕跡も見られない。一方で、アーサー王伝説に適合させるために枠組みが改変されていることは明らかで、アーサーは保護者となる王の役割を狼男の義父と共有している。狼男とこの人物（保護者となる王）との関係は、狼男と妻の宮廷での再会を導くものである。「モラハ」でも狼男と妻は再会するが、再会を導く要因は説明されない。

妻の扱い方という点では、「メリオン」は「アーサー王とゴラゴン王」より「モラハ」に近い。彼女は罪を問われるが、斟酌される。「メリオン」の最も著しい特徴は、物語の冒頭で主人公がアイルランドから来た乙女に見初められるところにある。その後、彼女は彼を厄介払いすると、祖国に帰ってしまう。この冒頭部分が重要性を持つのである。マリッドルフランスの「ビスクラヴィレット（狼男）」の話は次のように展開

する。

主人公は生まれながらにして狼男であって、週のうち三日は狼の姿で過さなければならず、服を脱ぐことで変身する。そのことを知った妻が、夫の服を隠してしまい愛人と結婚する。他の物語と同様、王の狩りが行われ、狼男は王の寵愛を勝ち取り宮廷に住まう。彼は妻の新しい夫を襲い、次に妻を襲う。秘密が暴かれ、妻は拷問にかけられて、ついには狼男の服を差し出す。狼男は人間の姿に戻り、妻は新しい夫と共に追放される。

ここでは、類似作品に見られる重要なテーマの一つが簡潔な形であらわれている。この物語は「メリオン」から派生したものでなく、「アーサー王とゴラゴン王」や「モラハ」の背後にあると思われる共通の起源から派生したものでない。一方、「ビスクラヴィレット」のテーマはこれら三作品の単独の起源であるはずはない。つまり、「メリオン」や「アーサー王とゴラゴン王」、「モラハ」に見られるそのほかの要素はさておき、本来の「狼男の物語」と呼ばれていたであろうものがかつて存在していたということになる。

「メリオン」、「アーサー王とゴラゴン王」、「モラハ」の関係についていえば、「メリオン」は「アーサー王とゴラゴン王」のウェールズ語版から派生したはずはない。「メリオン」にはその枠組みがないし、「アーサー王とゴラゴン王」には「メリオン」の冒頭部分の痕跡が見られない。同じ理由で、「メリオン」が「アーサー王とゴラゴン王」の直接の起源であるとは言えない。「モラハ」は「メリオン」に登場する妻を想起させるような確固とした痕跡を持っているので、「アーサー王とゴラゴン王」から「モラハ」ができたはずもない。

つまり、次のように仮定できる。「アーサー王とゴラゴン王」と「モラハ」には元となる共通の作品があり、それは「メリオン」に似ているが、「メリオン」そのものから派生したのではなく、「メリオン」の起源でもない。そこで、これら三つの話の起源を仮に「X」と呼ぶと、最初に派生したのは「メリオン」で、挿話によってアーサー王伝説群に変化していった。たぶん、「X」には枠組みが構築されていなかった、そうでなければ、「メリオン」に枠組みがないことの説明がつかない。しかし、そのうちに「X」に枠組みができ、この時期にウェールズ語の「アーサー王とゴラゴン王」になった。「メリオン」はゲール語を話す地域で生き続け、変化が加えられてより精巧になり、やがてアイルランドやスコットランドの農夫の間で今なお語られる形を帯びるようになった。しかし、「X」それ自体は、見てきたように、マリの詩から派生したものではない。「X」もマリの詩もどちらも根本的には同じ起源をたどるはずである。

「狼男の物語」（「ビスクラヴィレット」は別として）と他の三つの物語に共通する要素の起源である「X」の再構築に当たっては、「メリオン」が最も重要な手がかりとなる。「メリオン」に続いて現在も流布している民話も、「アーサー王とゴラゴン王」よりもずっと後に記録されたものであるが、古代の *Tales* の要素をより完全な形で保持してきたと考えられる。

以上のように、妻の行いに対するより寛大な措置や、「メリオン」では妻が自分の父親の国に戻りそこへ変身した夫が追って行くという点で、「X」と「メリオン」の二つは「アーサー王とゴラゴン王」とは区別される。「メリオン」だけが重要な始まり方をしていて、キットリッジ教授の推測通り、その冒頭で妻が超自然の種族であることが示されている。そこで、教授は元となる「X」を次のように再構築する。

「アーサー王とゴラゴン王」

アイルランドの神話にはよくある話だが、超自然の乙女は人間である主人公の勇敢さに魅せられて彼に求愛する。しかし超自然の国に残してきた恋人が彼女の後を追ひ、彼女を説得して彼らの国フェアリーに連れて帰る。今度は人間の夫がフェアリーまで追いかけて行き、彼女を取り返す。たとえば、最も有名な古いアイルランド神話の一つである「エーダインの求愛」は次のように展開する。エーダインはミデーの不死の妻である。人間の姿で生まれ変わった彼女は、泉のそばでアイルランド王のエオカイドに出会う。彼は妻を探しているところだが「エリン国の家臣たちの誰もがまだ知らない」女でなければ満足できない。エーダインはその条件に適い、二人は結婚する。ミデーは彼女を追って人間界へ下り、三回の賭けに勝って（前後関係に違いがあるものの今なお民話の中で起こる出来事である）、エオカイドからエーダインを取り返す。ミデーは彼女を妖精の国に連れ戻すが、エオカイドはそこへ二人を追ひ最終的に彼が彼女を取り返すのである。

こういった一つの話が、それは必ずしも「エーダインの求愛」とは限らないが、それと同じ系譜を引く話が、「ビスクラヴィレット」の後半部分と同程度の段階に発展していた「狼男の物語」と融合し、それが仮説の「X」の元の話になったのではないかと、キットリッジ教授は推測する。「狼男の物語」自体が、そのテーマを守りつつ、変化する人間の感情に合うように様々な段階を経て発展してきたことには間違いないだろう。まず、根本的には、狼男は同情に足る人物であったといえよう。なぜなら第一に、民話の主人公は共感できる人物と決まっています。第二に、その話の形成時期の文化では、半人半獣という性質には不快なものとか邪悪なものといった概念が伴わなかったからだろう。しかし、後にそういった概念が生じたのも間違いなく、それは膨大な狼男の物語と構想に表れている。この時期に妻が同情に足る人物になったと仮定できる。も

とも、主人公に敵対する彼女は共感できる人物ではないが、道徳的には咎められない。主人公は非常に望ましい力の所有者として妬みの対象であったが、もつと後になると、不実な妻に道徳的非難を負わせることで、不面目を負わされた彼への共感が再び募るようになる。マリの「ピスクラヴィレット」の最も古い記録はこの時期に形成されたものである。

二つのタイプの物語、つまり妖精の乙女の恋愛から人間と超人間の勝負を描くアイルランド神話と、妻による意図的な夫婦の決裂を扱う「狼男の物語」の融合に、理論上の問題が生じないことは以下の説明から察せるだろう。それらが融合した時点で、エーダインタイプは恐らく既にかなり変化していたと思われる。アイルランドの妖精の乙女のロマンスの最古層では、ヒロインの立場がもつとも重要になる。ヒロインから求愛し、絶対的な自由を持って愛情を与えては引つ込める。人間である恋人はどんな権利も持たず、要求もしない。しかし、ゲール語のロマンスにおいてさえ、古くからの決まりごとを厳密に守る一方で、異文化の影響を多少なりとも受けているので、上述のように見事なまでに道徳観念を超越した女性の態度が、ごく普通の人間になっていく変遷を辿ることができる。自由で自己中心的な女神は、堂々たる愛情にあふれるが、用心深く自立を守り、気まぐれで不実な女性になる。このような変遷は、先に挙げた二つのタイプの物語の融合によって促され速められるのだろう。ヒロインの性質にはどちらにもあいまいなところがあり、彼女は次第に悪い女に変わっていく。融合の過程は、語り手の態度のみならず話の趣向にも影響を与え、それによって物語の変化が促される。その変化にともない、狼男の変身は生来の特質によるものから、他の物語群の系譜に倣った、敵対的に行われるまじないによるものとなる。このプロットが究極的に発展したものが「アーサー王とゴラゴン王」である。これはラテン語へ学術的に翻訳された際に、『七人の賢哲』で巧みに表現さ

れているような女性の不実さを描いた東方の物語にもとづいて部分的に作り変えられた。注目すべきは、現在の民話は趣向に変化が見られ、今も変化し続けさらに複雑なものとなってはいるが、道徳的態度における変化の度合いには到底およばないということである。とはいえ、大衆民話には、おぼろげではあるが間違いなく古代の神話ロマンスとの心情面での類似性が残っている。

これまでキットリッジ教授の素晴らしい研究の概略を述べてきたに過ぎない。読者諸君におかれては、教授の著書を参考にしていたきたい。教授の著書は、民話特有の類型、出来事、筋の展開、相互関係および話の変化の理論的根拠に関する詳細な調査に富んでおり、民話研究家にとっては魅力的な一冊である。紙面に限りがあるので更なるコメントと批評は割愛させていただくが、最後に教授による結論を二つ述べさせていたこう。

「アーサー王とゴラゴン王」が現存したのはほんの偶然だったのだが、その存在が知られてなければ、「ブルトン・レー」のような貴重な書の歴史を解説する」のに「モラハ」を持ち出すと必ず批判を浴びるだろう。「何だって、現代の民話を使うなんて、批評力に欠ける！」と。しかし、ラテン・ウエルズ語の民話が現存する事実は、現在流布している民話をわれわれが参照することを正当化するものではないが、それを参照することの正当性を証明する機会を与えてくれるのだ。二つめの結論についてはキットリッジ教授自身のことばをそのまま使わせていたこう。「われわれの具体的な研究成果は、アイルランドに関する題材の重要性と、一連の問題を解決するにあたっての『現代アイルランド』民話の重要性を強調することである（すなわち、中世ロマンスへのケルトの影響である）」

フォークロア・ソサエティでの最初の仕事以来、上述の見解をかたく

なに擁護してきたが、今やそれから二十五年近く経ち、私は、同様の見解がフランシス・ジェイムズ・チャイルドの衣鉢を受け継ぐ優れた学者によって力説されるのを見ると、喜びを隠せない。

① (原注) “Gorlagon”は“Gorgalon”の字位転換であり、“Gorgol”の拡大形である。古代ウェールズ語の“Gurnol”あるいは“Guorguol”にあたり、この語の第一音節はラテン語の“vir”、アングロサクソン語の“wer”と語源が等しい。後者についてはリース教授がゲルマン語の“wolf”と同一であると二十年前に指摘している。

② (訳注) キットリッジ教授の著書では、英雄は三度続けて勝ち、四度目に負けるとされている。

③ (原注) ここでの要約および後の「モラハ」の言及の箇所には複数のヴァージョンを用いている。一つのヴァージョンに全ての出来事と特徴が包括されることはないからである。

※この翻訳の底本は、*Folk-Lore: A Quarterly Review of Myth, Tradition, Institution, and Custom*. Vol. XV. London: The Folk-Lore Society, 1904. 40-67である。

※訳文中、傍点は著者による強調(原文イタリック体)、「」内は訳者による補足である。

「アーサー王とゴラゴン王」 解題

「アーサー王とゴラゴン王」は、膨大なアーサー王伝説群の一説話と人狼伝説が組み合わされたもので、短いながらも層の厚い非常に興味深い物語である。物語成立の正確な年代は不明であるが、ウェールズ語で書かれたケルトの民話が遅くとも十四世紀までにラテン語に翻訳されたものと考えられている。

このラテン語の原稿はオックスフォードのボードリアン図書館で見つかり、一九〇三年にハーバード大学のG・L・キットリッジ教授によって初めて発表された。(Studies and Notes in Philology and Literature, vol. viii. Boston: Ginn and Co. 149-275)後に研究書がニューヨークのハスケル・ハウスから出版されている(Arthur and Gorlagon: Versions of the Werewolf's Tale. New York: Haskell House, 1966)。その後、F.A. ミルンによって英語に翻訳され、アルフレッド・ナットによる「あとがき」と共に、『フォークロア・ソサエティ』十五号に発表された(Folk-Lore: A Quarterly Review of Myth, Tradition, Institution, and Custom. Vol. XV. London: The Folk-Lore Society, 1904. 40-67)。ナットによる「あとがき」は、「アーサー王とゴラゴン王」が形成されるまでの発展過程を知る上で、貴重な資料となる。ナット自身が述べているとおり、「あとがき」はキットリッジ教授の調査の要約であるが、この物語の源泉を辿る道しるべとなる、類似作品との比較、派生、混成の痕跡を端的に明らかにしている。

アーサー王伝説物語が、イギリスから、フランスを中心にヨーロッパ各地に伝播し、さまざまな騎士道物語や宮廷恋愛物語に発展していったことは、周知の通りである。十二世紀にジェフリー・オブ・モンマスはケルト語の古い書物を素材に『ブリタニア列王史』をラテン語で記述し

たので、ラテン語を解する教養人たちにアーサー王の名が広まった。「アーサー王とゴラゴン王」もまた、物語中に記される三人の王の名前から、もともとはウェールズ語の民話であったものがラテン語に翻訳されたと推察される。

物語は二重の入れ子構造になっている。外枠にはアーサー王の探求の旅物語があり、その内側にゴラゴン王の狼男物語がある。この中のアーサー王像は、他の騎士道物語に登場する勇ましく堂々たる威厳を持つアーサー王ではない。「女の心も本性も」分かっていないという物語の冒頭で妻の一言が、彼を「女の心、女の本性、そして女のやり方」を知る旅へと駆り立てる。ここにはアーサー王の妻グイネヴィア王妃と円卓の騎士ランスロットとの関係が暗に示唆されているといえよう。アーサー王は「女の心、女の本性、女のやり方」を知る旅に出る。彼が答えを求めて訪ねる先は、ガーゴール王、トールレイル王、ゴラゴン王の元である。これらの三人の王は同一人物であるというのが定説になっているが、ラテン語版ではこの点について矛盾が見られることから、どうも翻訳者はこれらの三人の同一性には気がついていなかったようである。実際は一人の王が、名前を変え場所を変えるのは、アーサー王の探求を阻み、狼男の話をするのを避けるため、あるいはそれをできるだけ先延ばしにするためのデバイスだと考えられる。

アーサー王は最初に訪ねるガーゴール王と次に訪ねるトールレイル王に晩餐を勧められると、断りきれずに馬から降りてしまい、彼の探求は二度阻止されてしまう。三人目のゴラゴン王の元では、彼は強い意志を見せ、答えを聞くまでは決して馬から降りず食事にも応じない。ゴラゴン王はあきらめて、自分の知るある王の身の上話を語り始める。そこに狼男の話が組み込まれている。

その王は賢くて慈悲深く、端麗な人物であったが、美しくも不実な妻

によって狼男に変身させられてしまう。狼男になった王は復讐心に燃え、妻と新しい王の間の子どもを殺し、家畜の殺戮を繰り返して、一つ国を追われると、次の国へと逃れて行く。そして三つ目の国で、その国の王の庇護の下におかれ、狼男と王は片時も離れないほどの関係になる。狼男は次に、王の妻と給仕頭との情事を暴き、妻の手から幼い王子を救う。王に忠実に貢献した狼男は、王の援助を得て自国に戻り妻への復讐を果たす。護符の木の枝を妻から取り戻し、彼は人間の姿に戻ることができ、ここで、物語の外枠へと戻る。話を終えたゴラゴン王は、アーサー王に自分こそが狼男であったことを告白する。ゴラゴン王の目の前では裏切り者の妻が生きながらにして罰を与えられ続けている。「この話を聞いても、そうは賢くはならない」「この話を聞いた以上、自分のことに目を向け賢くなったか試してみよ」アーサー王に向けられたゴラゴン王のこういった言葉は、アーサー王と妻グイネヴィアとの関係を思えば皮肉に響く。

この話の形式と趣向は、三人の兄弟の設定、三人の王に対するアーサー王の三度の挑戦と二度の失敗、三度目の成功、断食の誓い、妻の不貞（この物語では二重の不貞）といったケルト民話の特徴を色濃く反映している。さらに、この物語の成立が十二世紀頃と考えるならば、その時期には「狼男の物語」なるものがすでに流布していたことになる。キットリッジ教授は、「アーサー王とゴラゴン王」が内包する狼男物語は、当時すでに存在していた「狼男の物語」の変遷の一過程を呈していると指摘す

る。狼男の変身について言えば、中世に書かれた類似作品の「メリオンのレー」や「ビスクラヴィレットのレー」では、主人公は生まれつきの狼男として設定されているが、この物語では不実な妻がある護符（主人公と同じ時に生まれた木の枝）のまじないを用いて主人公を狼男に変身させる。さらに、狼男自身が物語を語る点や、不実な妻への残虐な復讐、そして狼男の王への忠誠心にも「狼男の物語」の発展の痕跡が確認できる。

このように、「アーサー王とゴラゴン王」は、アイルランド民話やその系譜を引くさまざまな民話から派生した物語の一つに、アーサー王伝説と狼男物語が融合したものである。その発展・混成の過程において多重の層が複雑に重なり合っているが、物語自体は実に軽快に語られ、単純で、ユーモラスな一面も見せる。

付記 この翻訳は、立命館大学学内提案公募型研究推進プログラムによる「人狼研究会」（竹山博英教授代表）の英語分会（ウェルズ恵子教授担当）で行った研究成果です。翻訳に必要な資料収集や文献調査は、同プログラムへの研究助成金によって行うことができました。深く感謝いたします。

（橋本万里子 本学文学研究科研究生）
（高木麻由美 本学文学研究科博士後期課程）